
立てこもり対引きこもり

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

立てこもり対引きこもり

【Zコード】

N4151E

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

頭の一文字が違うだけ。だけど二人は全然違う。

俺の名前は立戸守夫。^{たてこもりお}口髭がトレードマークの、自称ワイルドなフリーターだ。

フリーターだから、いつも定職につかずいろんな仕事をやってきた。が、こここの所上手く行かない。それどころか、やることなすこと上手くいかない。

この間は引越しの仕事をやつていたら、後輩のメタボリック腹にポンと跳ね飛ばされて、大富豪が一番大事にしていたツボを割つてしまつた。

当然弁償を迫られた俺は、大富豪を首で絞め殺して逃走するシリ－ションをしながら、借金でそれを弁償することとなつた。
どうして俺がこんな日に、ムシャクシャした俺がフラフラしていると、定食屋で「強盗及び殺人の罪で、三十代前半の男を指名手配中」というではないか。

よし、強盗を掴まえてやろう、と思うことはなく、むしろ「なんでこんな金儲けの方法を考え付かなかつたんだ」と思い立ち、近所の銀行を水鉄砲で襲撃した。

銀行員が、幸いなことに揃いもそろつてカナヅチだったので、水鉄砲を見ただけで、泡を吹きながら氣絶してくれた。

しめしめと金を盗んで、このままオサラバかと思いきや、銀行員の一人が倒れる間際警察を呼んでいたのか、サイレンの音が聞こえてきた。

調子こじっていた俺は、ヤバイと叫びながら、大慌てで閑静な住宅街へと走つた。

どこか隠れるところはないかとキヨロキヨロしていると、その一つにとても忍び込みやすそうな巨大なマンションがあつたので、俺は金網をよじ登つてそこに飛び込んだ。

流石閑静な住宅街だ、こんな大胆なことをしても誰も悲鳴一つあげないぞ。

「キャー！ 泥棒よー！」

と思つていたら、いきなり六十なのに四十代と偽つていそなパーマおばさんに悲鳴をあげられてしまった。

やべっ！ と、扉の開いていないエレベーターに飛び込んでしまうほど慌てた俺は、階段を一心不乱に駆け上った。

こうなつたら、部屋のどこかに忍び込んで、静かになるのを待とう、それしかない。

そうと決まれば、早速鍵の開いている部屋を片つ端から探した。閑静な住宅街なので、こんなことしていても誰にも見つかなかつた。

ついでに鍵の開いている部屋も見つからなかつたので、キレた俺は扉を蹴破ると、ズカズカと土足で人の家へと踏み込んだ。中には誰もいなかつた。しめた、丁度留守だつたようだ。いや、でも誰か隠れてるかもしれない、俺は片つ端から部屋を開放していった。浴室、クローゼット、台所の引き出し、トイレ、寝室……。

そして、最後の一つをあけた途端、猿がひき潰されたのような、すごい悲鳴が聞こえてきた。

異常なまでに散らかつた部屋の中には、一人のひ弱そうな体型をしている、白いシャツと短パン姿の青年が、頭を抱えて蹲つていた。「お、お前は誰だ。この家の人間か！」

俺は、秘蔵のアトミックウォーターガンを相手に向けて聞いてみた。相手は、ビクビクしながら、ハイと答えた。

くそ、なんてことだ。こんなところで躓くとは。こうなつたらヤケだ。

「今からこの部屋に俺は立てこもるー。ほら、早くひっかこ来いー！」

「い、嫌だ。出たくない」

「どうしてだー！」

「ぼ、僕は引きこもりなんです！」

「えー、じゃあ仕方ないな」

俺はそれを聞いて諦めた。引きこもりを無理矢理外に出そうとしても心を傷つけるだけだ。

「なら、俺がそっちに行くから、ちょっとお邪魔するぞ」

「え？」

「俺も人生がかってんだ！ 賴むよ…」

「は、はい……」

こうして俺は、なんとか引きこもりの部屋に立てこもることになった。

僕の名前は日置金盛。
ひきかねもり

今、どういうわけか僕の部屋には、銀行強盗をしてきたという男が入ってきて、そのまま立て籠もっている。

困ったことになった。早くこの状況を打破しなければいけない。

僕は今、非常に危険な状態にある。

なぜかといえば、僕は立てこもりの人には「僕は引きこもりだから出たくない」という弁解をしてしまったからだ。

実を言うと、僕は引きこもりではない。

こんなひ弱に見えて、僕は大学では野球部で週三回汗を流し、社会人になつても野球をするつもりなくらい、野球が好きだ。あと、握力に自信がある。

休みの日は雨が降るうが雪が降るうがランニングして、密かにプロ野球なんか狙ってしまっている。

もう外に出るのが好きで好きでたまらない。そういうアウトドアの典型と自分で言つても過言ではない人間だと、自分では思つている。

なのに……。

「（どうしてあんな言い訳をしてしまったんだ？）…………」

僕は頭を抱えた。こんなことなら、大学で船場教授の『言い訳講座』を聞いておくんだった。

扉が蹴破られた音を聞いた僕は、テンパって部屋の中を散らかしてしまった。どこに隠れようかとして慌てていたためである。ありとあらゆるものを投げ飛ばし、隠れる場所を探したあげく、なかつたので仕方なく蹲つてやり過ごそうとしたのだ。

しかし、この行動が結果的には自分の命を救つた。窓から飛び降りようとした僕は、窓が開かなかつたので、野球道具を窓に投げつけて逃げようとしたのだ。

いや下を見ると、とてもそんなことは出来ずに戻つてきたけれど、窓が割れる音が聞かれていたか心配だったけど、この様子では聞かれていならしい。

とにかく今は、精一杯引きこもりを演じて、生き残るしか……な

いつ！

「ところで君」

「は、はい……」

「この窓どうして割れてるんだ？」

バレた！

どうしよう……言い訳を考えなくては。くわ、船場教授ならここでよい知恵を浮かばせてくれるだろ？

「ああ、そうか。わかつた」

「え……」

「無理矢理外に出されようとしたから、暴れて窓を割っちゃつたんだな。可哀想に、出たくないよな？ 外なんて」

「は、はい……」

なんか勝手に納得してくれた。といつかこの人は本当に悪人なんだろうか？ それすら疑問に思えてくる。

いや、とにかく今は、僕がここから脱出する方法を考えなくては。この人が善人であろうと悪人であろうと、捕まるよつのことをしているのは事実なんだ。

「なんだか外が騒がしいな」

「おやが警察が……」

俺は割れた窓から外を見ようとした。すると、引きこもりくんが飛びついてきたので、思わず俺は後ろにひっくり返った。

「何するんだ！」

「ひ、光はやめてください。お願いですから」

おお、こめんなし、お俺が一合で外見でくるから、迷はせない。

と、念を押してから俺は玄関に向かった。見事に扉が壊れていたので、靴箱にしまってあつた日曜大工道具できっちり直すと、廊下から外を見渡す。

くそ、あのババアめ、大袈裟にしやがって。
いや、それだけのこ
とをやつているのか自分は。

に監察に職務を突きつけられてもあれた。とにかく、なれば。

急いで俺は、引きこもりくんの部屋に戻った。

チャンスだ！ 僕はこつそりと逃げる準備をした。外を見回つて

いるなら、抜け出すチャンスもあるだろ？

抜き足差し足で外に出る。今は誰もいない。よし……いまのうち

「あつ」

なんで扉直してんだあの人は―――つ！ もしかして、本格的に
籠城するつもりなのか！

警察が来たというのはテラメで、僕を閉じ込めるために扉を直すために外へ……迂闊だった。

もしかしたら、僕が引きこもりじゃないこともバレてしまつてい

るのでは。どうしよう、本格的にやばい。

くそ、こんなことなら引きこもりなんて名乗らなければよかつた。せめてインター・ポールの刑事とでもいつてビビらせるんだつた。

ええい、こうなつては仕方ない。急いで部屋に戻つて、とにかく引きこもりを演じ続けよう。

僕がこの事実に気づいていないといふことにして、相手を下手に刺激しないようにするんだ！

ビクビクしながら、僕は布団の中に潜り込んだ。ああ、これが引きこもりの気持ちなんだなと、そう思ひながら。

「ああ、可哀想に。こんなビクビクしちゃつて。ごめんなあ、驚かして」

俺はそろそろ彼を解放してあげても良いかもしない。人質にしておいてなんだけど、そろそろ哀れだ。

こんな引きこもりが安心して暮らせない日本にしてはいけない。ただでさえ今の時代は人が荒んでいるんだから。

だからといって、この金をみすみす逃す手はない。今度俺は競輪で一発当てたいと思つていた。そのための軍資金としては十二分だ。金が良心か。もはや悪人である俺に、神は良心を選べとさせやつて来る。

俺の名前は立戸守夫。^{たてど もりお}口髭がトレーデマークの、自称ワイルドなフリーターだ。

フリーターだから、いつも定職につかずいろんな仕事をやってきた。

が、ここは所上手く行かない。それどころか、やることなすこと何もかも駄目だった。

この間なんた、引越しの仕事をやつていたら、後輩のメタボリック腹にローンと跳ね飛ばされて、大富豪が一番大事にしていたツボを割つてしまつた。

当然弁償を迫られた俺は、大富豪を首で絞め殺して逃走するシミュレーションをしながら、借金でそれを弁償することとなつた。

どうして俺がこんな日に、ムシャクシャした俺がフラフラしていると、定食屋で「強盗及び殺人の罪で、三十代前半の男を指名手配中」といつではないか。

よし、強盗を掘まえてやるう、と思つことはなく、むしろ「なんでこんな金儲けの方法を考え付かなかつたんだ」と思い立ち、定職屋の帰りついでに、俺は近所の銀行を水鉄砲で襲撃した。

銀行員が、幸いなことに揃いもそろつてカナヅチだったので、水鉄砲を見ただけで、泡を吹きながら氣絶してくれたので、仕事は至極楽勝だつたが。

そんなわけで、しめしめと金を盗んで、そのままオサラバかと思ひきや、銀行員の一人が倒れる間際警察を呼んでいたのか、サイレンの音が聞こえてきた。

調子こいていた俺は、ヤバイと叫びながら、大慌てで閑静な住宅街へ逃走する。

どこか隠れるとこはないかとキヨロキヨロしていくと、その一つにとても忍び込みやすそうな巨大なマンションがあつたので、俺は金網をよじ登つてそこに飛び込んだ。

流石閑静な住宅街だ、こんな大胆なことをしても誰も悲鳴一つあげないぞ。

「キヤー！ 泥棒よー！」

と思っていたら、いきなり六十なのに四十代と偽つていそなパームおばさんに悲鳴をあげられてしまつた。

やべつ！ と、扉の開いていないエレベーターに飛び込んでしまうほど慌てた俺は、階段を一心不乱に駆け上つた。

いつなつたら、部屋のどこかに忍び込んで、静かになるのを待とう、それしかない。

そうと決まれば、早速鍵の開いている部屋を片つ端から探した。閑静な住宅街なので、こんなことしていても誰にも見つからなかつ

た。

ついでに鍵の開いている部屋も見つからなかつたので、キレた俺は扉を蹴破ると、ズカズカと土足で人の家へと踏み込んだ。中には誰もいなかつた。しめた、丁度留守だつたようだ。いや、でも誰か隠れてるかもしれないと、俺は片つ端から部屋を開放していった。浴室、クローゼット、台所の引き出し、トイレ、寝室……。

そして、最後の一つをあけた途端、猿がひき潰されたのよくな、すごい悲鳴と破裂音が聞こえてきた。

異常なまでに散らかつた部屋の中には、ひ弱そうな体型をした白いシャツと短パン姿の青年が、頭を抱えて蹲つていた。

「お、お前は誰だ。この家の人間か！」

俺は、秘蔵のアトミックウォーターガンを相手に向けて聞いてみた。相手は、ビクビクしながら、ハイと答えた。

くそ、なんてことだ。こんなところで躓くとは。こうなつたらヤケだ。

「今からこの部屋に俺は立てこもるー。ほら、早くひっかかって来いー。」

「い、嫌だ。出たくない」

「どうしてだ！」

「ぼ、僕は……引きこもりなんですー！」

「えー、じゃあ仕方ないな」

俺はそれを聞いて諦めた。引きこもりを無理矢理外に出そうとしても心を傷つけるだけだ。

「なら、俺がそっちに行くから、ちょっとお邪魔するぞ」

「え？」

「俺も人生かかってんだ！ 頼むよー。」

「は、はい……」

こうして俺は、なんとか引きこもりの部屋に立てこもることになつた。

僕の名前は日置金盛。ひきかねもり

今、どういうわけか僕の部屋には、銀行強盗をしてきたという男が入ってきて、そのまま立て籠もっている。

困ったことになった。早くこの状況を打破しなければいけない。

僕は今、非常に危険な状態にある。

なぜかといえば、僕は立てこもりの人間に「僕は引きこもりだから出たくない」という弁解をしてしまったからだ。

実を言うと、僕は引きこもりではない。

こんなひ弱に見えても、僕は大学では野球部で週三回汗を流し、

社会人になつても野球をするつもりなくらい、野球が好きだ。

休みの日は雨が降るうが雪が降るうがランニングして、密かにプロ野球なんか狙つてしまっている。

もう外に出るのが好きで好きでたまらない。そういうアウトドアの典型であると言つても過言ではない人間だと、自分では思つている。

なのに……。

「（どうしてあんな言い訳をしてしまったんだろう……）」

僕は頭を抱えた。こんなことなら、大学で船場教授の『言い訳講座』を聞いておくんだった。

扉が蹴破られた音を聞いた僕は、テンパつて部屋の中を散らかしてしまった。どこに隠れようかとして慌てていたためである。

ありとあらゆるもの投げ飛ばし、隠れる場所を探したあげく、なかつたので仕方なく蹲つてやり過ごそうとしたのだ。

しかし、この行動が結果的には自分の命を救つた。窓から飛び降りようとした僕は、窓が開かなかつたので、野球道具を窓に投げつけて逃げようとしたのだ。

いざ下を見ると、とてもそんなことは出来ずに戻つてきただけれど。窓が割れる音が聞かれていなかつたか心配だったけど、この様子では聞かれていないらしい。

とにかく今は、精一杯引きこもりを演じて、生き残るしか……な
いつ！

「ところで君」

「は、はい……」

「この窓、どうして割ってるんだ？」

「バレた———っ！」

どうしよう……言い訳を考えなくては。くそ、船場教授なりに
でよい知恵を浮かばせてくれるだらうに。

「ああ、そうか。わかった」

「え……」

「無理矢理外に出されようとしたから、暴れて窓を割っちゃったん
だな。可哀想に、出たくないよな？ 外なんて」

「は、はい……」

なんか勝手に納得してくれた。というかこの人は本当に悪人なん
だろうか？ それすら疑問に思えてくる。

いや、とにかく今は、僕がここから脱出する方法を考えなくては。
この人が善人であろうと悪人であろうと、捕まるようなことをして
いるのは事実なんだ。

「なんだか外が騒がしいな

「まさか警察が……」

俺は割れた窓から外を見ようとした。すると、引きこもりくんが
飛びついてきたので、思わず俺は後ろにひっくり返った。

「何するんだ！」

「ひ、光はやめてください。お願いですから」

「ああ、ごめんな。じゃあ俺が一人で外見てくるから、逃げたり自
殺したりしないでくれよ」

と、念を押してから俺は玄関に向かった。見事に扉が壊れていた
ので、靴箱にしまってあつた日曜大工道具できつちり直すと、廊下

から外を見渡す。

くそ、あのババアめ、大袈裟にしゃがって。いや、それだけのことをやつているのか自分は。

とにかく、このままここにいてもあれだ。警察に要求を突きつけなければ。

急いで俺は、引きこもりくんの部屋に戻った。

チャンスだ！ 僕はこいつそりと逃げる準備をした。外を見回つているなら、抜け出すチャンスもあるだろう。抜き足差し足で外に出る。今は誰もいない。よし……いまのうちには。

「あつ」

なんで扉直してんだあの人——つ！

もしかして、本格的に籠城するつもりなのか！

警察が来たというのはテタラメで、僕を閉じ込めるために扉を直すために外へ……迂闊だった。

もしかしたら、僕が引きこもりじゃないこともバレてしまつているのでは。どうしよう、本格的にやばい。

くそ、こんなことなら引きこもりなんて名乗らなければよかつた。せめてインター ポールの刑事とでもいつてビビらせるなんだった。

ええい、こうなつては仕方ない。急いで部屋に戻つて、とにかく引きこもりを演じ続けよう。

僕がこの事実に気づいていないということにして、相手を下手に刺激しないようにするんだ！

ビクビクしながら、僕は布団の中に潜り込んだ。ああ、これが引きこもりの気持ちなんだなと、そう思いながら。

「ああ、可哀想に。こんなビクビクしちゃって。『めんなあ、驚か

して「

俺はそろそろ彼を解放してあげても良いかもしない。人質にしておいてなんだけど、そろそろ哀れだ。

こんな引きこもりが安心して暮らせない日本にしてはいけない。ただでさえ今の時代は人が荒んでいるんだから。

だからといって、この金をみすみす逃す手はない。今度俺は競輪で一発当てたいと思っていた。そのための軍資金としては十二分だ。金が良心か。もはや悪人である俺に、神は良心を選べとささやって来る。

だが、その横からいつもの俺の悪がど突いて来る。いいじゃないか、金で。どうせ世の中は金だろ？ 金を選ぶのが人間の本質つてものだらう。

くそ―――っ、どうすればいいんだ―――！ 俺は頭を抱えて座り込んだ。

立てこもりの人気が騒ぎ始めた―――！ うわあああ、うわああああああああああ！

警察に追い詰められて、いよいよ発狂し始めたのか！ いよいよ命が危ない。

どうしよう、嘘ついていたことを謝るか。そうじやないと本氣で殺される！

別にリンチにされようが構わないけれど、やっぱり殺されるのは絶対に嫌だ。

俺には、付き合ってまだ一週間も経っていない彼女が居る。とうかこの間初めて出来た。

せつかくこれから人生薔薇色だつていうのに、それはないだろう！ くそ、こうなつたら謝ろう。少しでも誠意を示して許してもらおう！ そして、それに乘じて警察にも助けを請おう、それしかない。僕はベランダに向かつて叫びながら走った。思わずテンパつて飛

びこんでしまつたので、ガラスの残りごとぶち壊した僕には、無数のガラス片が突き刺さつた。

激痛に呻きながらも、土踏まずで思い切りガラスの破片を踏んでしまった僕は、そのままグラウンドから転倒した。

ひゅん、と自分の身体が空を切るのが聞こえた。

「ああああああああああああああああ！」

「今日未明。マンションで起つた、六十なのに四十代と偽つていそつなペーマあばせん殺人事件について、一報書いたします」

記者会見場に、無数のフラッショウがたかれた。

「犯人は日置金盛。狂気はバツトで、ベランダから投げて落としたものと見られます。犯人の部屋には、もう一人男があり、現在事情を聞いていますが、今のところ、共犯者なのか人質なのかはわかりません。しかし、酷く怯えているようでした」

淡々と語る刑事に対し、一人の記者が質問をした。

「それが……」「

すると、今度は少し気難しい顔で、言いにこねながらも、ゆつくつと答えた。

「独房の布団の中で、引きていたているのです」

(後書き)

野中英次先生の漫画作品「未来町内会」が終わってしまった寂しかったので、野中先生のギャグを真似ようとして、失敗。いつもの僕と変わらなくなってしましました。これではいけません。今回はおまけに情景や人の形を書ける暇もなかつたし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4151e/>

立てこもり対引きこもり

2010年10月8日15時47分発行